手先の動きと子どもの感情 ⑨

清水エミ子

一、ひとりでいられる空間での手先の行動

子どもたちがよろこんであそび出している時や、積極的にあそびに参加している時のようすをじっとみつめてみると、広い部屋のすみであったり、置いてある物によってできたくぼみ、（観察台と机の間、ピアノのうしろ）というように、自分たちでみつけた、開拓した場所、自分たちが創造して生み出した安定できる空間であることが多い。

この自分たちの作った空間は、ひとりひとりが自分で活動できる場所であり、安心して、おちついて活動に参加し展開できる場所だから、せまくてもかっこうがわるくても、少々動きにくくても、生き生きとあそび、活動しているのではないだろうか。

こんなことに気づいて、このくぼみの中でひとりでいる時の手先の反応をみつめてみると、グループや集団で活動している時の手先の反応と、ちがっていることに気づいた。

これにも個人でのちがいはあるが、大半がひとりでくぼみにいる時のほうが、すなおに、大たんに、手先が動いているのだ。今まで集団やグループの中でみていた時とちがう大たんさが発見されたのだ。これは、やはり、安定と自信とが、手先に反応しているのだと思われる。ひとりで、不安でなく、安定していられる空間での手先は、その子どもの心のおくにひそんでいる可能性を表わしてくれているのだと思う。

子どもたちの可能性がすなおに手先に表われる時、安定し、大たんになるのではないだろうか。このくぼみの中では、手先といっしょに、声も大たんに表われてくるようだ。

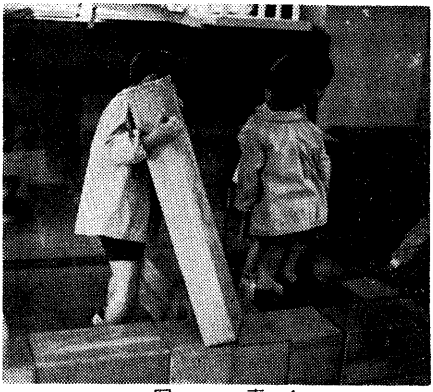
こんなようすをみていると、子どもたちにいろいろの空間、くぼみが、自分たちの手で、考えで創り出せるように環境をととのえておかなくてはと、つくづく感じるのだ。

例① 積木のかこいの中での手先と、保育室の机にすわっている時の手先のちがい

㋑ホールで中型箱積木をつかって、食堂をつくって六名がいっしょにあそんでいた。

ゆたか、ひでお、ひろあきの三人が、いくつかに区切られた一区切りの中で、積木をなおしたりしていた。その時のゆたかの指先は、

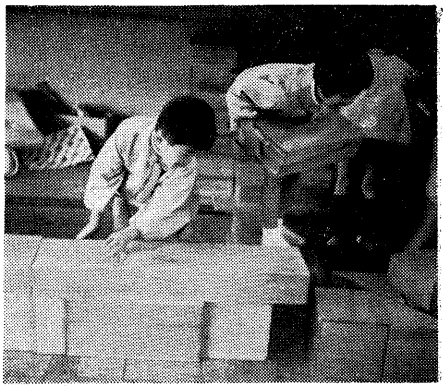
・友だちのさそいで行動し積木を持とうとする時は、安心しながらも、その一部にきんちょうが加わっている反応のようだった。（写真1）



写　真 1

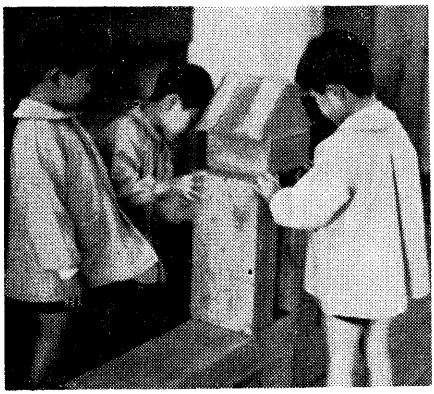
「ゆたかちゃん、そこは、もっとでかい積木にしたほうがいいよ。たおれるといけないからさ。あっちのもってきてやってよ」と（ひろあきに）いわれて「うんいいよ」と答えて、大きな直方体の積木を持ちはこぼうとした時の指先は、

・積木にさわろうとする時に指先に力が入っていた。（写真2）



写　真 2

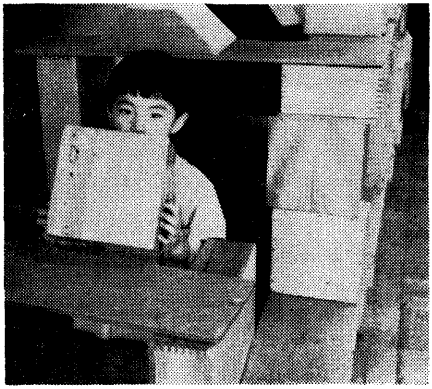
・積木を持ってしまってからの指先はゆるやかに安定し、力をぬいて持ち、積木をもてあそんでいるような表われであったのだ。（写真3）



写　真 3

しばらく三名はいろいろな想像をたのしんでいたが、ゆたかをのこし、他のふたりは外に出てしまった。

ひとりで積木のかこいの中にいた時の



写　真　4

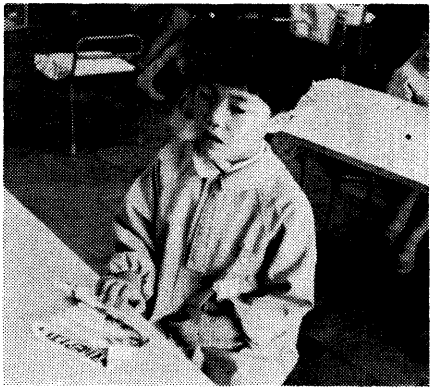
ゆたかの指先の反応は、

まずひとりで、ブツブツ何かをつぶやきながら、一見たのしそうなのだが、指先全体に力が入っていて、積木をおとしたり、たおしたりしてしまっていた。

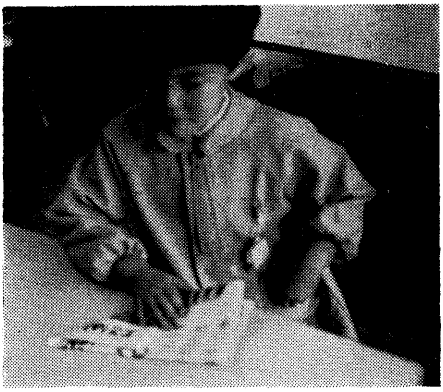
積木をたおしたあと、おとしたあとに、ゆたかは右手の中指、薬指、小指の三本を、チョコチョコとうごかして、そのしっぱいをまぎらせたり、カバーしたりしていたようだった。（写真4）

一回目の時はぐうぜんの指の動きかなと思ってみていたのだが、その後、数回、おなじように積木をたおしたり、おとしたりした後も、同じように右手の中指、薬指、小指は手のひらの方にゆるくチョコチョコと動いていた。このようすをみていて、

・二名の友だちがいなくなったコーナーにひとりのこった不安が、このような指先の反応に表われているのではないかと思われた。



写　真　5



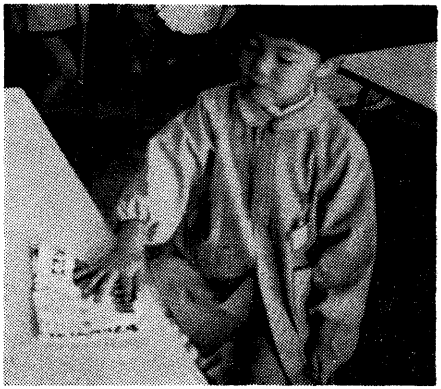
写　真　6

次の日、ゆたかは、他の友だち大半が園庭に出てあそんでいるのに、保育室の自分の席にすわり、広告の紙で何かを折ったり切ったりしていた。作り終わって、自分の引出しに作品をしまい、また座席にもどってイスにすわった。その時のゆたかの指先、手のひらは、前日の積木のコーナーでの指先とは、全くちがっていることを発見したのだ。

・上衣のボタンを意味なくくるくるいじりまわしていた。

（この時手先の動きのスピードは早いほうだった）顔の表情をみたが、大へん平静な顔をしていた。（写真5）

・次に上衣のポケットの左の上の部分（先端）を左の人さし指のはらで、往復なぜをしていた。



写　　真 7

（写真6）

この時は、やや口もとがゆるんでいるかなと思われる表情だったのだ。

・次は、両手のひらで、上衣のすそをにぎったりはなしたり、（にぎにぎ）していたのだ。（写真7）

この時のにぎり方は、指先に大分力がこめられており、人さし指の第一、第二関節から特に神経質にピクピクと動かしていたのだ。この時になってはじめてゆたかの顔に、きんちょうが表われた。室内をきょろきょろみまわしはじめた。みまわしながらも、上衣のすそをにぎる動作は止まっていなかった。

ここで、私は、ゆたかに声をかけてみた。

「ゆたかくん、どうしたの」とゆっくり顔をのぞきこんだ。すると、

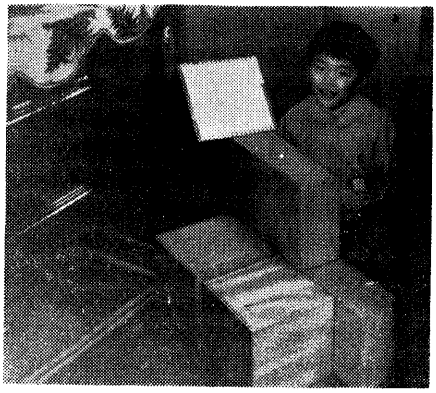
「あのね、外に出てもいいかなってかんがえてたの、どうしようか？」と自分で自分の行動をきめかね、はんだんにまよっていたことがわかった。

「みんな外でナワトビしてるみたいね。ゆたかくんもナワトビ持っていってごらんなさい」と、園庭に遊びに出ることを示してみた。

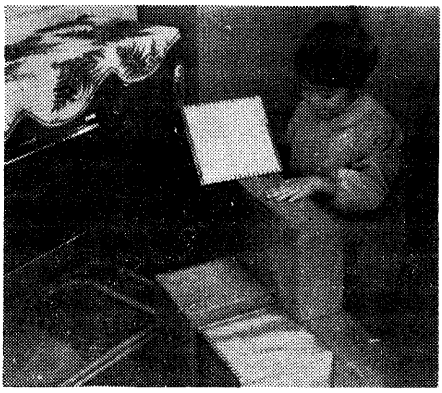
「うん、そうだね」とゆたかは答え、ナワトビを自分のロッカーに取りに行った。

・この時のナワトビを取り出す指先は、今までのとは全くちがい、手のひらに、ガッチリとナワトビのにぎりをつかみ、くぎからはずしていた。ゆたかの指先は、はっきりとまどいを表わしていてくれたし、心のじょうたいと、変化、移り変わりをはっきりと表現してくれていたのではないだろうか。

この二、三の変化の流れの間、顔での、体全体での表われは、あまりちがっていなかったのだ。（ちがいが表に表われにくくなっていた）ゆたかをみていて私は、手先や、手のひらでの表われは、体全体よりも早く、そしてくわしく心の動き、変化の移りかわりをつたえてくれるのだなあと、おどろきを感じたのだ。



写　真　8



写　真　9

次の日の自由な活動の時、

ホールのすみにおいてあるピアノのうしろに、中型箱積木を持ち出して、かこいを作っていた。ゆたかひとりが、やっと入り込める位のかこいなのだ。（写真8）

作ってしまったゆたかは、何をするという目的もないらしく、中にすわり込んでにこにこしていた。前日の積木コーナーでのひとりぼっちの時とは、全くちがっていたのだ。手先には、力は全く入っておらず、ゆったりと積木の面におかれ、時々、その面を、手のひらでなぜていた。（写真9）

次には、たいこでもたたくように両手で交互に積木の面をたたき出した。昨日のゆたかの手先には、みることもできなかったほどのしなやかさで動いていた。安心しているのだなと、このようすからうかがわれたのだ。きちんとすわりなおしたゆたかは、相変わらずらくに積木をたたきながら、

「いいゆだな、ハハハン、いいゆだな、ハハハン」とうたってから、手をにぎりしめて、

ひとりで積木の中で笑いころげていた。くりかえしくりかえし歌っているうちに、ポケットからハンカチーフを取り出し、四つにきちんとたたみなおし、頭の上にのせてひときわ大声で「いいゆだな……」と歌っていた。

・ゆるやかに自然のじょうたいでまげられた指は、全くの解放を表わしていたのだ。ひとりで入り込んだ積木のかこいの中で、ゆたかは、ゆっくり解放感を味わっていたのではないだろうか。

このようすをみつめていて、私は若かった頃の自分を思い出した。このような時、

「ひとりで、そんなところでなにしているの？　みんな外であそんでいるわよ、ゆたかさんもいってごらんなさいよ」といっていたのではなかったか。

交わりを豊かにし、友だち関係を正しく身につけさせることが集団生活をたのしくおくらせることなのだと、思い込み、みんなのいる所へ、グループへ、戸外へ、と子どもたちをおいたてていた時があったと、全身がカーッとあつくなり、はずかしさや子どもたちへの申しわけなさで体がこわばるのを感じたのだ。

今のゆたかのように、

・自分で作りだした自分の空間で、自分の思いのままにすごす一時の大切さを、

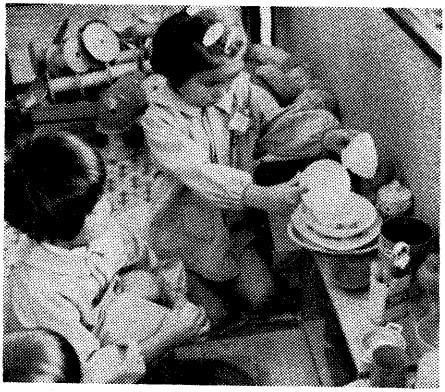
・自分で入りこむかこいの中での安定した一時をすごすことの大切さを、

・自分でみつけたり、作った空間に入っている時の心のやすまりを、

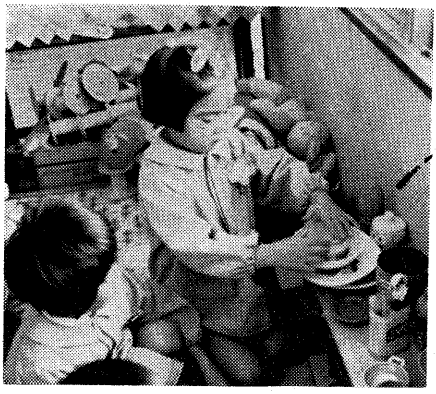
指先の表われからこんなにもはっきり知らされたことはなかったのだ。「ゆたかくん、いいきもちそうね、いいゆなのね」とことばをかけたとき、ゆたかは、チョコッとくびをたてにふって「キャーみられたか」と手のひらをあたまに持っていったのだ。ゆっくりと、安心した指先と手のひらだった。

例②　イスとオルガンで作った空間であそんでいる時の指先と、ままごとを友だちとしている時の指先のちがい

㋺　保育室のママゴトコーナーで、いくこ、さゆり、まりこ、たくじ、の女三名、男一名が木の葉などをつかってままごとをしていた。いくこは、女児の中でのあそびでは、あそびをリードすることを好み、自分のペースで皆をあそばせる傾向の強い子なのだ。そのため、あまりあそびの中できんちょうなくあそべる子だと今まで観察をしていたし、いくこも、体全体での表われではたのしそうに、くるくると動きまわっていたのだ。（写真10）



写　真　10



写　真　11

・しかし、いくこ

がお母さんになり、ごはんのしたくをすることになった時、

・ままごとどうぐに向かったいくこの指先は体全体、特に顔の表われとは全くちがったきんちょうの表現をみせたのだ。

・「きょうのごはんは、まぜごはんよ」と声や顔の表われは平素とかわっていないが、おちゃわんをつまむ指先と手のひらはこちこちになっている。（写真11）

特に人さし指とおや指に力が入りすぎ、遊具をつまんでいた。ごちそうができあがり、友だちにたべさせる時の友だちへの合図にも、きんちょうの表われがみえたのだ。

「さゆりちゃん、はい、これあんたのごはんなのよ」と、さゆりのひざをたたいての合図に、いくこの手のひらに、チラリときんちょうがみえた。手全体に力が入り、ピシャピシャとたたいていた。（写真12）

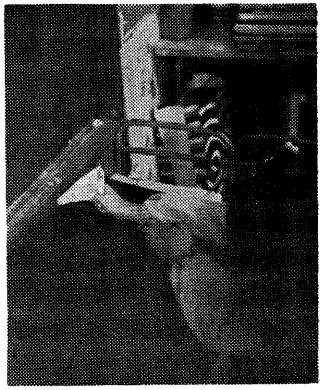
写　真 12

「いたいないくこちゃん、もっとそっとしなさいよ」といわれて、こまった顔をしていたのだ。こんなようすをみていて、子どもたちが、今、なかよくあそんでいたのにけんかになる時がよくある。そんな時は、今のいくことさゆりのようないきちがいが原因なのではないだろうかと気づいたのだ。体全体での表情はいつもとちがっていない。しかし手先や手のひらがちがっているため、相手にはよく通じず、「ぶった」と理解されてしまうし、「いたいなあー」といわれてしまう。自分は、ぶったのではないから、「ぶたないよ、おしえたんでしょ」「ちがう、ぶった」ということで、あらそいになってしまうのではないだろうか。

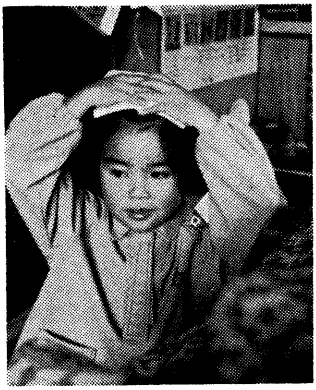
友だちに手先の反応がつたわっていれば、けんかにならず、いきちがいもおこらないのにとつくづく感じ、私は、

「さゆりちゃん、いくこちゃんがね、これさゆりちゃんのよ、って合図をちゃんとしようとおもったら、ちからがいっぱい入っちゃったらしいのよ。そうねいくこちゃん」と、遊びがつづけられるようにと思って声をかけてみた。「フーン、でもそっとでもわかるよ」「うん、ごめんね」これで、難なく遊びはつづいていったのだ。私たち保育者は、このように子どもひとりひとりの心をまちがいなくとらえ、つたわりにくいとき正しくつたえる手助けをすべきだとつくづく感じたのだ。

心を正しくよみとることは、子どもの心の表われを正しくよみとることを身につけなくてはできない。心を正しくよみとること



写　真　13



写　真　14

写　真　15

は、子どもたちの体のすみずみをみつめ、表われをみおとさないことではないだろうか。一番すなおに心が表われてくるところをつかむこと、その表われの特ちょうを理解することが大切なのだといくことさゆりのあらそいをみてつくづくと感じた。

その日のおべんとうのすんだ保育室のオルガンのかげで、ごそごそおとがしていたのでいってみた。

いくこが、オルガンのよこに子どものイスを持って来て、かこっているのだ。自分は中に入り込んでいる。「たくちゃん、もう二個ここにイスやってくれる」と、近くでボンヤリしていたたくじにたのんでいた。かこい終わったいくこは、オルガンのふたをあけ、オルガンのイスにすわって、オルガンをひきはじめていた。でたらめなうたを、口からでまかせを、ゆっくり一流の歌手になったような顔をしてうたい、ひいているのだ。ゆびはしなやかに、オルガンの上を、いったりきたりして、不協和音をかなでていた。手くびまで力がぬけ、だらりとして解放されていた。

しばらくひいてあきたのか、オルガンのうしろにしゃがみこみ、オルガンのイスを台に、ハンカチで何やら折り出していた。三角に小さく折ってピストルのまねをしていた。(写真13 14 15)手先、指先には、何にも力が入っておらず、らくにハンカチーフをわしづかみにしていた。イスの背中をさわる指先もらくだった。このいくこをみていると、

・自分で作った空間にポッコリ入り込んで安定し、自分の世界をたのしんでいたのだ。いくこが、自分の力で開拓して作り出した空間、かこいの中の安定は、心の安定と結びついていると思う。

自分で作った、ぐうぜんできた、かこいや空間を大切にみまもり、その安定の場での指先の動きをみつめ、その子の安定のしかたを正しくよみとる助けにしなくてはとつくづくと感じたのだ。